

友松対談 ②

懐旧談「横浜国大草創の頃」

戦前・戦中・戦後の話 【萩原淳子先生の経験された話】

【平成23年7月記録】



語り手 おいずる 生出 久雄 (昭和28年卒・国大1期)
聞き手 黒川 鈴谷 (昭和35年卒・国大8期)

黒川 本日はわざわざお出でいただきまして、ありがとうございました。先生は昭和24年入学、28年卒業の国大1期生ですが、その時の国大の入試はやはり2月か3月に行なわれたのですか。

生出 当時の大学の入試には1期校と、1期校の後に入試を行う2期校とありましたが、この年は国大は1期校でした。でも入試は3月でも4月でもなく、確か5月だったと思います。

黒川 新制大学発足の年だったので、いろいろ準備の都合上遅くなったのですかね。

生出 そうかもしれません。入試は5月でしたが、その前の年の12月頃に適性検査を受けました。

黒川 私たちの頃にも進学適性検査と言うのが有りましたが、先生のときの適性検査はどんなものでしたか。学力検査とは違うのですね。

生出 そう、学力検査とはちょっと違って、知能テストのようなものです。

黒川 その適性検査の結果によって、まず1次の選別をしたのですか。

生出 いや、その結果によって落としたりはせず、全員受験出来ました。あくまでも参考にしたということでしょう。入試の科目は国語・英語・数学の三教科だったと思います。

黒川 いやあ、良いですね。私たちの時の入試科目は確か社会・理科も入った5教科でしたよ。それで合格発表はいつだったのですか。

生出 5月に入試を行なって、6月に合格発表でした。

黒川 その年の入学生は何人くらいだったのですか。そのうち女子学生は何人くらいいましたか。

生出 入学したのは150人ほどです。そのうち女子学生は5人しかいませんでした。しかも卒業したのは、その5人のうち3人だけです。

黒川 信じられないような話ですね。私たちの時には約半分は女子学生でしたよ。しかも概して言うところ女子学生の方が真面目に勉強するので、成績はよかったな。

生出 もっとも当時は2年課程というコースがあって、ここには女子学生が多かったです。で、6月の合格発表のあと7月に入学式があって、そのあとは



国大1期生 卒業記念写真 鎌倉校舎玄関で

すぐ夏休みになり、夏休みが終ると9月には入学のガイダンスが始まりました。

- 黒川 それでは1学期はまるまる何もなかったわけですね。
- 生出 9月10月と二ヶ月間はほとんどガイダンス、つまりどんな講座があり、それは何単位かとか、必修の単位は何かとかの案内と指導で過ぎてしまいました。授業が本格的に始まったのは、11月からです。大学は前期・後期の2期制ですから、後期から授業など実際の活動が始まったのです。
- 黒川 私達の時には、立野の師範女子部の後に教養課程が出来て、学芸学部だけでなく経済も工学部も一緒に授業を受けたのですが、その辺りは1期の頃はどうかだったのですが。
- 生出 私達の時は4年間のうち2年間で一般教養で、全て鎌倉で授業を受けました。その2年間に自分が何を専門にするかを決めて、後半の2年間で専門課程の講義を聞くのです。もちろん2年目位に専門課程の講義を聴くことも出来ましたが。
- 黒川 そうすると入学の時には細かく学科別に分れていなかったのですか。
- 生出 全く分かれていませんでした。
- 黒川 文科系・理科系の区別も無かったのですか。
- 生出 全くありません。2年間の教養課程の間に自分の適性・能力を見極めて、大学生活後半の専門コースを決めなさいということでした。
- 黒川 何だかずいぶんゆったりした羨ましいような制度ですね。私は第8期生ですが、私達の入学した時には、初めから細かく学科に分かれていました。1期の頃のその制度は、いつごろまで続いたのですか。
- 生出 多分3期頃までで、4期頃から変わってきたと思います。と言うのは私は社会学専攻なのですが、4年生のとき社会学専攻の学生が集まったのですが、その中に1年生も居たので、その頃から学科別に入学するようになったのではないかと思います。
- 黒川 先生の頃には、どんな学科がありましたか。
- 生出 国語・英語・哲学・歴史・地理・心理・教育それから政治経済などです。あと理科系では数学・物理・化学・生物・農学など、そして美術・音楽・体育・家政などがありました。
- 黒川 専門学科は基本的には私達の頃と変わりませんね。
- 生出 いま思い返すと、国大が発足した頃には新制大学としては珍しいほど、いろいろな講座が充実していて魅力がありましたね。学芸学部の教授だけでなく、他の大学の教授が講師として出講して講義をしてくれました。例えば地理の大家だった東京教育大の田中啓爾(?)教授や東大の人類学の鈴木尚(?)教授等、けっこう有名な人が出講していました。
- 黒川 そういえば私が昭和31年に入学した後で、以前には文芸評論家の中村光夫が講師で来ていたそうだと聞いて、「本当かい。」と驚いたことがあります。
- 生出 当時、中村光夫は売れっ子でしたからね。中村光夫はペンネームで、本名は木庭(?)と言ってね、私も木庭講師の「フランス文学史」を受講しました。原書を持ってきてね、それを見ながら講義するのです。
- 理科系ではどこかの研究所の人が講師になったり、物理などは工学部の教授が来て講義していました。私の専門課程では、経済学部の長州一二教授が「社会思想史」の講義をしてくれました。
- 黒川 外部から講師が見えると同時に、もちろん師範の時代の先生方も講義されていたのでしょ

う。

生 出 どの先生が師範から来られたか、当時はあまり意識していなかったのですが、師範は旧制専門学校ですから大学の教授になるための資格問題があったかもしれませんが、師範の教授だった方が大学の教授にならずに助教授になったり、なかには専任講師になった人もいます。この方は後で学部長を勤められたようですが、米国に留学されてから教授になった方もいますね。カニで有名な酒井先生などは、理学博士ですから最初から教授になられたと思います。

黒 川 当時は専門課程の授業でも原書を使いましたか。

生 出 そうです。普通の講義でも原書を使いました。当時は原書を読まないで勉強にならない、実力が付かないと言われていました。例えば哲学の授業でもドイツ語の歴史哲学の本をテキストに使いました。哲学を専攻した人で、ドイツ語で卒論を書いた人もいましたよ。この原書は、4年のときゼミで教科書として使ったものです。この本を読んでいって順番に訳してそれに自分の意見を付け加えて述べるのです。もっとも意見は日本語で良かったのですが、この本は丸善で買ったのですが、値段が高くて弱りました。



黒 川 どのくらいの値段でしたか。

生 出 今の物価に換算すると5~7万円(?)くらいしたでしょうね。

この本を買うので奨学金が吹っ飛んでしまい、弱りました。でも私は今でも韓国語の勉強をしたりしているように、語学そのものは好きでしたから勉強することは苦になりませんでした。ドイツ語フランス語の他に英語専攻の人がとるような単位もとったりしました。

黒 川 国大の草創期には、何だかとても自由でアカデミックな雰囲気があったようですね。

生 出 そうです。必修の単位は「憲法」と「体育」くらいで、あとは全く自由に自分が学びたいと思うことを学ぶことが出来ました。学生同士も1~2年の違いは全く意識せずに友人として自由に付き合いしました。

黒 川 師範の時代には、上級生と下級生との間のけじめは大変だったようですが、大学にならずいぶん違ったのですね。

生 出 旧制中学までは、私達も同じように上級下級の厳しい区別がありました。国大になってそういうものがなくなった、少なくとも希薄になったのには戦後の民主主義の風潮もあるでしょうが、草創期の国大にあったある雰囲気というか、空気というか、そんなものの影響があったかもしれません。

黒 川 それはどういうことなのでしょう。

生 出 そもそも旧制師範を母体として生れた学芸学部が、なぜ「教育学部」とならず「学芸学部」となったか、よく分かりませんがガイダンスの時に聞いた話のうろ覚えでは、その理由の一つとして戦前の偏狭な教育を排除して視野の広い教養豊かな人間を作り、教育界だけでなく将来の社会全体のリーダーを育てるという考えがありました。この考えからは必然的に教育者を養成するだけでなく、物事を深く考え追及していき社会の各方面で活躍出来る人間を育てるという方向が導き出されます。

後に「文理学部創設運動」があったようですが、この運動はこの方向の延長線上にあったと言えるでしょう。私達の時代にも、学部内にそういった底流がありました。私達の頃

には2年間の教養課程がで必要な単位を取ってれば医学部を受験することも出来ました。私の友人にも医学部を受験した者がいます。

黒川 私達の時代にも、そういう底流の存在は何となく感じられました。しかし医学部を受験できたというのは初耳ですね。

生出 だから私と同期で国大に入学した者の中には、教師になる考えは全くない者もいました。私自身も初めは教師になろうと思っていた訳では有りません。自分の好きな講義しか受けなかったし、音楽など全然駄目でしたから初等教育には向いていないと思って、小学校の免許は取りませんでした。中学の免許も社会科だけです。ただ語学の単位はたくさん取っていたので、英語の免許は取れたかもしれません。でも読むだけのイングリッシュでは仕方ないと思って、取りませんでした。

黒川 1期のころには、どんな人達が入学してきたのですか。

生出 ずいぶんいろいろな経歴の人がいました。新制高校卒業以外に旧制高等専門学校1年修了者も受験資格がありましたので、師範の本科1年修了者や中には東京外語専門学校(後の東京外語大)の1年修了者もいました。その他、軍関係の学校の出身者もいましたよ。私の同級生の中には軍隊生活を経験した人もいて、その人はすでに結婚していて、奥さんが飲み屋のおかみをやって生活を支えていました。

黒川 ずいぶん多彩な人々で、一つの時代の変わり目を感じますね。

生出 いろいろな人が集まった理由の一つとしては、鎌倉という土地の魅力も有ったかもしれません。当時の鎌倉には文化人が多く住んでいて、「鎌倉文士」という言葉もありました。また国大が出来る少し前には、幻の大学と言われた「鎌倉アカデミア」がありました。これは正規の学校ではありませんが、鎌倉の文化人が中心になって創設し、自ら教鞭をとったので有名な学校です。私の国大の同級生にもこの出身者がいましたが、とても優秀な人でした。国大の創設期には、鎌倉の持つこういう雰囲気憧れた若者が多く集まったという面があると思います。



黒川 横浜国大が出来たのは昭和24年で、その前年の23年に師範の本科に入学した学生は、3年間在学して26年の春に卒業したはずです。そうすると昭和24,25年度の少なくとも2年間は国大と師範の学生が一緒にいたことになりませんが、前回の師範女子部の卒業生の方に伺ったところでは、すくなくとも立野では両方の学生が混在したことは無かったようです。鎌倉ではどうだったのでしょうか。

生出 師範の最後の学生が卒業したのは昭和26年春ですが、それまでの2年間は国大と師範の学生が混在していました。私達国大の学生は、教職課程の単位を普通は専門が決まった3年か4年で取るのですが、中には2年で取る人もいました。その場合は、師範の学生と同じ教室で机を並べて学びました。だからそういう師範の学生と国大の学生との間には確かに同窓意識があり、その意識は卒業して学校に勤めても続いていました。

私の経験でいうと、学校に勤めてからの「はまゆう会」という組織があります。これは師範の26年卒業者(つまり師範の最後の卒業生)と国大2年課程の26年修了者、それと国大4年課程の28年卒業者の三つのうち、勤務先が横浜の者及び横浜在住者で作った組織

です。つまり学生時代はそれぞれ所属する組織は違っていたが、同じ時代に同じ鎌倉と言う場所で学んだという共通の体験によって結びついている組織です。この「はまゆう会」の会合は、今でも毎年続いています。残念ながらメンバーは次第に減ってはいますが。

黒川 本日はご多忙のところをご出席いただき、貴重なお話をありがとうございました。まだまだお伺いしたいこともございますが、一応この辺で終わりさせていただきます。

戦前・戦中・戦後の話 【萩原淳子先生の経験された話】

萩原淳子先生は、昭和12年に当時の神奈川県女子師範学校を卒業され、その後、戦前から戦中戦後にかけてずっと市内の小学校に勤務されました。その貴重な体験を伺ったのが以下の文章です。文中で「私」とあるのは萩原先生のことです。



私が教師になろうと思ったのはいつ頃だったかと思うのですが、たぶんずっと幼い5歳くらいの時に、近所の子達と学校ごっこをしていた頃から心の中に漠然と芽生えたのだと思います。

小学校を卒業した昭和6年に、当時家があった中区の大和町の近くの女子師範附属小学校の高等科に入学しました。小学校の高等科と言っても若い方には分からないでしょうが、当時の小学校は尋常科6年が義務教育で、その上に高等科2年があったのです。その頃の制度では、師範に進むには小学校高等科卒業が入学資格だった5年制の本科1部にいくか、高等女学校を卒業して師範の本科2部に進むか、二通りの道がありました。そこで私は附属の高等科から、師範1部に進む道を選んだのです。

師範には寄宿舎がありましたが、私は家から学校まで歩いて10分くらいだったので自宅から通学しました。ただ本科1部5年間の最後の1年だけは寄宿舎に入りました。1部屋に3~4人で、学年はばらばらでした。

師範での勉強のことは、もう昔のことなのでよく覚えていませんが、本科に入ったばかりの頃、体育主任の小畑先生が身長143センチの私に「チビだけど俺が師範に入れてやったんだぞ。」とよく冗談を言われました。家庭科の島田先生には、野菜の重さが目分量で分かるのを褒められました。それから本科4年の昭和10年頃から、英語の授業が無くなったのを覚えています。

昭和12年に師範を卒業して、保土ヶ谷区の峯小に赴任しました。担任したのは2年の女子組でした。峰小に3年いて、次に元街小に転任しました。ここでは教頭先生に勧められて師範の専攻科に入学しました。専攻科に1年いて、平楽小学校に替わりしました。

昭和16年にアメリカとの戦争が始まった時には、職員室で先生達の間で少し話が出ましたが、低学年の受け持ちでしたので子供達にそのことで話をした記憶はありません。昭和19年には学童疎開が始まり、箱根強羅の温泉旅館に集団疎開し、そこで食事の支度を手伝ったりしました。

昭和20年5月29日の横浜大空襲の時には、勤め先の三沢国民学校(昭和16年4月から22年3月まで、小学校は国民学校と名称が変わった。)が焼けました。子供達は疎開でいみせませんが、留守を守っていた同僚の若い女の先生が防空壕の入口に近いところにいたために、かなりひどい火傷を負い、病院に連れて行くことも出来ない状況なので皆で寝ずに介護しましたが、翌日亡くなりました。

私は眉を焦がしただけで済みましたが、大和町の実家も焼けてしまいました。幸い家族は無事で

したが、家財ほとんど全てを焼失しました。

戦後は金沢小学校に勤務し、その後で泥亀町の蓮田の中に出来た八景小に移りました。昭和 27 年ころから児童の数が増え教室が足りなくなって、午前と午後に分けた二部授業をしたり、それでも教室が足りなくて校内の階段に子供を座らせて授業したりしました。

まだいろいろなことがあったと思うのですが、今ではもうはっきりとは思い出せません。思い出せる限りのこととお話いたしました。

※ この項は、萩原先生のお話を先生のご長男の方に聞き取って頂いたメモをもとに、私(黒川)が文章化したものです。先生は今年 94 歳のご高齢なのに無理にお願いしてお話を伺ったので、誠に申し訳なかったと思います。こういう企画を、10 年前とは言わなくともせめて 5 年前に実現していたらと思うと残念でなりません。

無理にお願いした萩原先生とご家族の方には、謹んでお詫び申し上げます。



横浜国大 旧鎌倉校舎 (旧神奈川師範)



横浜国大 旧立野校舎 (旧神奈川女子師範)